



Title	「確信度」からみた中国語話者を対象とする日本漢字音教育の課題：2級新出漢語の読み方に関する調査結果の分析
Author(s)	汪, 南雁
Citation	大阪大学言語文化学. 2015, 24, p. 115-127
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77749
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「確信度」からみた中国語話者を対象とする日本漢字音教育の課題 —2級新出漢語の読み方に関する調査結果の分析—*

汪 南雁**

キーワード：中国語話者、日本漢字音、確信度

目前，如何提高汉字音读的学习能力，是日语汉字教育上的一大课题。其中以汉语为母语的日语学习者由于受到汉语读音影响，在学习音读时特别容易产生混淆。针对此课题，本研究以汉语为母语的日语学习者作为研究对象，调查了日语汉字音读的学习现状（对已学内容的掌握程度，对已学内容的应用程度，对未学内容的推测能力）。并通过对自信程度（下称“确信度”）的分析，对日语汉字音读教育上的问题进行了分析探讨。

通过对中国南京市某大学 55 名日语专业 2 年级学生（日语能力 3 级左右）进行的问卷调查，了解了学生对日语能力考试 2 级音读单词的读音的掌握程度以及对其持有的确信度。根据此调查结果，对确信度和正确率的关系、影响确信度的因素、确信度和误答类型的关系这三个方面进行了分析并得出以下 3 个结论。

第一、确信度与正确率之间存在正相关关系。确信度很高的学习者，正确率一般高于 60%；确信度不太高的学习者，正确率处于 40% 前后；确信度很低的学习者，正确率一般低于 20%。

第二、被调查的音读单词是已学还是未学将直接影响学习者的确信度。对于已学内容，大多学习者都回答很有自信；对于可以利用已学知识推测的未学内容，大多学习者都回答不太有自信；而对于纯属猜测的未学内容，学习者们几乎都回答完全没有自信。由此可知，通过了解学习者的确信度情况，可以了解日语汉字音读学习的现状。

第三、根据确信度的不同，误答的类型也会有所不同。虽然很有自信但是却出错的回答中，由长短、音训问题引起的较多。而完全没有自信的误答中，由母音的更换、子音的更换等引起的较多。不太有自信时的误答中则以清浊问题居多。

以上 3 点中，最值得一提的是第三点。因为从各个确信度的问题可以得知各个日语汉字音读学习阶段的难点。而从确信度看出的共同问题点则是日语汉字音读教育上的一大课题。综上所述，我们可以得知，日语汉字音读教育的课题是，学习单词中个别汉字时遇到的问题（例如：长短和清浊等），而不是学习整个单词时出现的问题（例如：促音化和浊

* 从确信度角度探讨以汉语为母语的日语学习者的日语汉字音读教育问题
—有关 JLPT2 级音读词汇发音的问卷调查分析报告 (WANG Nanyan)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

音化等)。因此, 若能解决这些单词中个别汉字音读学习上的问题, 学习者们将可以更准确而且更有效率的学习日语汉字音读。由此可见, 本研究对于今后日语汉字音读教育以及学习的研究与发展具有重要意义。

1 問題意識と研究目的

これまでの日本語教育では、中国語話者であれば漢字がわかるという安易な考えによって、中国語を母語とする学習者も日本語教師も漢字の学習と教育をおざりにしてきたと指摘されている(阿久津, 1991)。いかにして漢字の読み能力を向上させるかは、中国語話者を対象とした日本語漢字教育上の重要な課題の一つである。

その課題に関する主な先行研究として、以下のものが挙げられる。阿久津(1993)は、学習者を混乱させる日本語の清濁について、主に濁音の仮名表記と連濁現象の二点から考察している。加納(1994)は、中級段階の漢字圈学習者では漢字の読みに不正確さが残る場合が多いが、特に字音語の読みに清濁、長短、促音の有無などの間違いが多いと指摘している。濱田・高畠(2009)は、清濁・長短・促音の有無などの問題のほか、子音の交替・添加・脱落による誤り、母音の交替による誤りなど合計11種類の誤答パターンがあることを明らかにした。胡(2012)は、学習者は中国語の発音が同じであれば、日本語の音読みも同じであると考える傾向があると指摘している。

以上のような漢字音教育の課題に関する先行研究は数多くあるが、1)対象漢字の範囲、2) 音訓による区別、3) 誤答パターン、4) 確信度、については問題点が残っていると考えられる。以下、各々の問題点について検討した後に、本研究での課題を述べる。

まず、対象漢字が常用漢字全体を中心としているものが多い。しかし、学習者は段階的に日本語を学習するため、対象漢字の範囲を絞ったほうが、学習上の問題点を探ることにも、解決策を考えることにも有効であると考えられる。本研究では、現場の日本語教育、特に初級段階を終えた後の中級の漢字・語彙教育に貢献することを念頭に、中級段階の一つの目安である日本語能力試験2級の新出漢語1871語¹に限定する。

また、音読みと訓読みを区別していない。しかし、音読みは訓読みと異なり、古い中国漢字音に由来するため、中国語を母語とする学習者は、母語の中国漢字音を音読みに適用する可能性がある。従って、本研究では、音読みと訓読みを区別する。

更に、誤答のパターンについて体系的に分類するものがない。誤答のパターンについ

¹『日本語能力試験出題基準(改訂版)』では、3級語彙表で1409語、2級語彙表で5035語が挙げられている。筆者の調査では、そのうち漢語は3級で394語、2級で2210語であった。本研究では2級の2210語から3級と重複する339語を引いた1871語を調査対象とする。このように2級新出漢語が急速に増えたため、漢字学習の困難点になると予想される。

ては、これまでの多くの研究において清濁・拗音・長短・促音²・撥音に関する誤りが問題視されてきた。しかし、体系的に（子音や母音など）考えれば、清濁は子音の問題であり、拗音は半母音の問題であり、長短と促音と撥音は特殊拍の問題である。実際の日本漢字音学習現場では、清濁以外の子音の問題（子音の交替や脱落など）もある。母音についても同様の問題（母音の交替や脱落など）が起こっている。このように、誤答パターンは上記の5つ以外にもあることや、学習者がどのような誤答をしているかを把握するためにも、誤答パターンをより詳しく調査する必要がある。本研究では、学習者の誤答結果に基づき、誤答パターンについて分析する。

最後になるが、本研究で最も重要な点は確信度を導入したことである。これまでの中中国語話者の日本漢字音学習における問題に関する研究では、学習者の確信度を含めたものがなかった。ここで確信度を、学習者自身が出した解答にどれだけ自信、確信を持っているかの程度と定義する（本研究では、「自信がある」と「あまり自信がない」と「全く自信がない」の3段階の尺度で表した）。では、確信度はなぜ必要か。同じ誤答であっても、その解答に自信があるが誤りとなった場合と、その解答に自信がなくて誤りとなつた場合がある。従来の研究では、この2つをまったく区別せず、同列に扱っているが、この2つの場合はまったく種類の異なるものである。本研究では、両者を区別した上で日本漢字音の課題を検討することとする。

以上の先行研究の問題点を踏まえた上で、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（以下中国語話者）を対象に、日本語能力試験2級新出漢語に限定し、漢字音習得の状況を調査する。その際、学習者の確信度に着目し、1) 確信度と正答率の関係、2) 確信度に影響を与える要因、3) 確信度別の誤答パターンを明らかにし、日本漢字音教育上の課題を検討することを目的とする。上記の3点を明らかにするべく、各々について以下の3つの仮説を立てた。

仮説1：確信度が高いほど正答率が高いという相関関係がある。

仮説2：確信度は当該の漢字³・漢語が既習か未習かに大きく依存する。

仮説3：確信度により、誤答パターンは異なる。

2 調査の概要

中国語話者の漢字音習得状況を調査するために、日本語能力で3級レベルの中国語話者を対象に、日本語能力試験2級新出漢語49語⁴の読み方、及びその読み方に対する学

² 先行研究でいう促音を本研究では単語レベルの「促音化」と定義する。それに対し、「活字（かつじ）」を「かじ」と読むような場合は漢字レベルの「促音」問題と見なす。

³ 漢語を構成する要素である。

⁴ この49語は、2級新出漢語（1871語）の中から無作為抽出したものである。

習者の確信度について、アンケート⁵を実施した。

本調査を行う前に、調査項目や調査方法などが不備のないように、予備調査を実施した。予備調査は、2014年3月に、日本国内のA大学で学ぶ留学生（日本語専攻ではない）3名を対象としたアンケートである。表1に示した通り、自信がある場合は①、自信がない場合は②に書いてもらった。調査後、さらに、調査項目や調査方法の適切さについて、インタビューを行った。その結果、「自信がある」と「自信がない」に加え、「あまり自信がない」という欄も設けたほうがよいという意見があったため、本調査では表2のように、3段階とした。また、調査票は中国語の方がよいとの意見から、本調査では中国語の調査票⁶を用いた。

表1 予備調査の調査票

2級新出漢語の読み方に関する調査			
出身地 :	() 省 () 市		
日本語学習歴 :	() 年 () 月		
来日年数 :	() 年 () 月		
以下は全て日本語能力試験2級レベルに相当する漢語です。これらの漢語の読み方（つまり音読み）を（ ）の中に書いてください。自信がある場合は①の下に、自信がない場合は②の下にご記入ください。空欄のないようにお願い致します。（20分）			
番号	漢語	①	②
[1]	外交	()	()
[2]	分野	()	()
[3]	経々	()	()
[4]	符号	()	()
[5]	機関	()	()
[49]	明確	()	()

表2 本調査の調査票

2級新出漢語の読み方に関する調査				
学年 :	年生	出身地 :	() 省 () 市	
日本語学習歴 :	() 年 () 月			
日本に行つたことある？ ある／ない				
以下は全て日本語能力試験2級の語彙表から抽出したものです。（ ）の中に読み方（音読み）を書いてください。自信がある場合は①の欄に、あまり自信がない場合は②の欄に、全く自信がない場合は③の欄にご記入ください。空欄のないようにお願い致します。（20分）				
番号	漢語	①	②	③
[1]	外交	()	()	()
[2]	分野	()	()	()
[3]	経々	()	()	()
[4]	符号	()	()	()
[5]	機関	()	()	()
[49]	明確	()	()	()

以下、本調査について詳述する。2014年4月に本調査を実施した。調査協力者は、中国南京市にあるN大学で日本語を学ぶ大学2年生の55名である。全員、中国語母語話者で、日本への留学経験はない。担当教員による⁷と、日本語能力試験3級レベルに相当する学生が中心である。調査協力者に、調査票を配布し、49語の調査項目について読み方を確信度別に書いてもらった。

なお、すべての調査は、研究にのみ使用すること、データ分析や学会発表にあたっては、調査対象者の人権やプライバシーに配慮し、調査対象者に不快の念を与えることのないよう、十分に注意を払うことを学習者に説明し、承諾を得た上で、実施した。

3 分析と考察

調査協力者55名のうち、日本語能力試験1級及び2級合格者が各1名、確信度につ

⁵ このアンケートは、テストの解答とアンケートの回答との2つの性格を持ち合わせている。

⁶ 本調査票は中国語であるが、紙幅の都合上、日本語に訳したものを見表2として示す。

⁷ 中国の日本語を専門とする大学生で日本語能力試験3級を受験する学生は比較的少ないため、学習者の日本語レベルは担当教員の判断に基づく。

いて正確に把握していない協力者が1名、空欄のある協力者が11名いた。有効回答数はそれら14名を除いた41名である。以下、この41名のデータに基づき、1) 確信度と正答率の関係、2) 確信度別の漢語群の特徴、3) 確信度別の誤答パターン、について分析を行う。

3.1 確信度と正答率の関係

表3は個々の回答者に注目し、各回答者及び学習者全体の確信度別（つまり、「自信がある」、「あまり自信がない」、「全く自信がない」）の正答率を示したものである。

表3 学習者の確信度別及び全体の正答率

学習者番号	確信度別									全体(Z)					
	自信がある(J)			あまり自信ない(A)			全く自信がない(M)								
	総数(Jt)	正答数(Jc)	正答率(=Jc/Jt)	総数(At)	正答数(Ac)	正答率(=Ac/At)	総数(Mt)	正答数(Mc)	正答率(=Mc/Mt)						
1	21	21	100%	15	7	47%	13	0	0%	49	28	57%			
3	25	13	52%	6	1	17%	18	3	17%	49	17	35%			
5	18	12	67%	15	4	27%	16	6	38%	49	22	45%			
6	8	6	75%	7	7	100%	34	7	21%	49	20	41%			
8	1	0	0%	34	13	38%	14	0	0%	49	13	27%			
10	12	11	92%	8	6	75%	29	5	17%	49	22	45%			
51	25	22	88%	13	9	69%	11	2	18%	49	33	67%			
平均			78%			46%			13%			51%			

まず、全体の正答率は51%である。一方、確信度別で見た場合、「自信がある」の正答率は78%、「あまり自信がない」は46%、「全く自信がない」は13%となっている。次に、確信度別に各学習者の正答率をみると、「自信がある」グループの中でも、学習者によって、正答率に差が見られる。そして、「あまり自信がない」と「全く自信がない」のグループでも同様の結果であった。

確信度と正答率の関係を詳しく見るために、確信度別に各学習者の正答率を、0%、1～9%、20～29%、30～39%、40～49%、50～59%、60～69%、70～79%、80～89%、90～99%、100%の12階層に分けた。Nはいずれも41である。図1は「自信がある」と答えた人、図2は「あまり自信がない」と答えた人、図3は「全く自信がない」と答えた人の正答率の分布を示している。図1～3から、「自信がある」の学習者の正答率は主に60%以上、「あまり自信がない」の学習者の正答率は40%を中心分布しており、「全く自信がない」の学習者の正答率は20%以下に集中していることがわかる。従って、確信度と正答率には相関関係があると言える。この結果は仮説1を支持している。

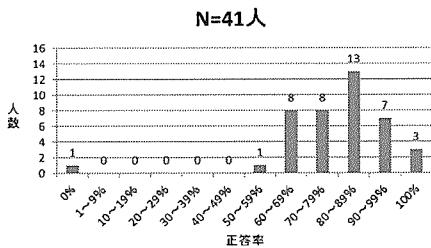


図1「自信がある」の正答率の分布

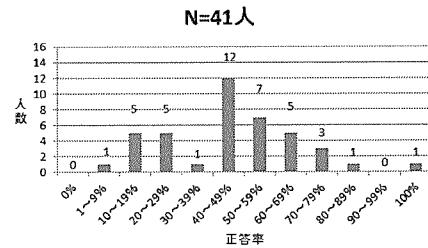


図2「あまり自信がない」の正答率の分布

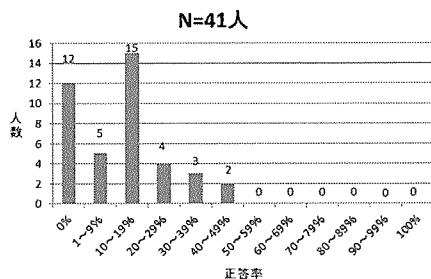


図3「全く自信がない」の正答率の分布

3.2 確信度別の漢語群の特徴

前節の通り、確信度と正答率には相関関係が見られた。では、確信度に影響する要因は何だろう。それについて、本節では、調査項目に着目し分析を行い、検討する。

表4は、学習者の回答に基づき、49語の調査項目について、確信度別の回答者数と回答をまとめたものである。読み方の後にある数字は回答者数を意味する。例えば、「外交」について、15名が「自信がある」を選択している。そのうち、11名が「がいこう」と書いている。また、「★」印は、①と②と③中で最も人数が多いものを意味する。

表4 漢語別の人数と回答

漢語	①自信がある		②あまり自信がない		③全く自信がない		合計 (名)
	小計(名)	内訳	小計(名)	内訳	小計(名)	内訳	
外交	15	がいこう11 かいこう1 (後略)	*22	がいこう11 かいこう6 (後略)	4	がいこう1 かいこう1 (後略)	41
分野	13	ぶんや11 ぶんや2	9	ぶんや5 ぶんや1 (後略)	*19	ぶんや4 ぶんの4 (後略)	41
続々	★21	つきつき7 つづ6 (後略)	7	ぞくぞく つづ5 (後略)	13	つきつき3 (後略)	41
符号	3	ふごう2 ぶごう1	14	ふごう3 ふうこう2 (後略)	*24	ふごう8 ふうこう3 (後略)	41
機関	★35	きかん32 きかい3	3	きかん1 きこう1 (後略)	3	きかん1 きかい1 (後略)	41
得意	★37	とくい37	4	とくい3 とうい1	0	該当なし	41
明確	14	めいかく13 めんたく1	*19	めいかく11 めいがく1 (後略)	8	めいかく5 めいしか1 (後略)	41

表4を見ると、「続々」「機関」「得意」などの漢語は「自信がある」が最も多い。「外交」や「明確」などの漢語は「あまり自信がない」が最も多い。「分野」や「符号」な

どの漢語は「全く自信がない」が最も多いことがわかる。表4を基に分類していくと、49語のうち、「自信がある」が最も多い漢語は23語、「あまり自信がない」が最も多い漢語は8語、「全く自信がない」が最も多い漢語は16語である。そのほか、「自信がある」と「全く自信がない」が同数である漢語は1語（「税」）で、「あまり自信がない」と「全く自信がない」が同数である漢語も1語（「評価」）ある。

次に、これらの漢語が多くの学習者にとってそれぞれ「自信がある」、「あまり自信がない」、「全く自信がない」となる理由、すなわち、確信度に影響を与える要因について検討する。そこで、回答者が使用している日本語の教科書⁸におけるこれらの漢字・漢語の学習状況について調査し、確信度別の漢語群の特徴を考察する。

表5は、多くの学習者が「自信がある」と回答した漢語を取り上げたものである。◆印は、既習漢字の中で複数の音読みをもっているものであり、表6と表7も同様である。表5から、「自信がある」が多い漢語には、漢語として既習であるものが約半分含まれ、漢字として既習であるものも約半分含まれていることがわかる。そして、表5の中の「全体に占める割合」が50%以上の漢語はほぼ既習漢語（例：「曲」や「注目」など）であり、50%以下の漢語は既習漢語ではないが、その中で使用されている漢字は他の漢語（例：「流行」や「友好」など）で既に学習しているものが多いこともわかった。

表5「自信がある」が最も多い漢語及びその教科書での学習状況

漢語	①「自信がある」			漢語として既習	漢字として既習								
	個数	全体に占める割合 (=個数/41)	正答数		正答率 (=正答数/個数)	一番目			二番目				
						漢字	発音	既習	漢語例	漢字	発音	既習	漢語例
流行	16	39%	13	81%	×	流	りゅう	○	一流	行	こう	○	銀行
友好	17	41%	17	100%	×	友	ゆう	○	友人	好	こう	○	恰好
是非	18	44%	16	89%	×	是	ぜ	×	非	ひ	○	非常	
永遠	18	44%	13	72%	×	永	えい	×	遠	えん	○	遠慮	
続々	21	51%	1	5%	×	続	ぞく	○	存続	続	ぞく	○	存続
公平	22	54%	22	100%	×	公	こう	○	公立	◆平	へい	○	平日
信号	22	54%	9	41%	×	信	しん	○	自信	号	こう	○	番号
曲	23	56%	19	83%	○								
注目	24	59%	19	79%	○								
国語	24	59%	22	92%	×	国	こく	○	国際	語	ご	○	日本語
風景	27	66%	19	70%	○								
内科	28	68%	27	96%	○								
収入	30	73%	26	87%	×	収	しゅう	○	吸収	入	にゅう	○	入学
中心	31	76%	30	97%	○								
機関	35	85%	32	91%	×	機	き	○	機械	間	かん	○	関係
歌手	35	85%	27	77%	○								
外出	35	85%	32	91%	○								
被害	36	88%	34	94%	○								
得意	37	90%	37	100%	○								
自然	38	93%	35	92%	○								
入社	38	93%	33	87%	○								
誤解	38	93%	33	87%	○								
人気	39	95%	36	92%	○								

⁸ 1年次は『日語精読』第一冊、2年次は『日語精読』第二冊を使用し、調査時点（2014年4月現時点）では『日語精読』第二冊の第14課を勉強していた。

表6「あまり自信がない」が最も多い漢語及びその教科書での学習状況

漢語	②「あまり自信がない」			漢語として既習	漢字として既習							
	個数	全体に占める割合 (=個数/41)	正答数 (=正答数/個数)		漢字	発音	既習	漢語例	漢字	発音	既習	漢語例
夫人	18	44%	11	61%	夫	ふ	○	夫人	じん	○	外国人	
集中	18	44%	14	78%	最	さい	○	最近	ちゅう	○	中国	
自治	19	46%	0	0%	自	じ	○	自信	じ	×		
応用	19	46%	10	53%	応	おう	○	応援	よう	○	用意	
分野	19	46%	10	53%	分	ぶん	○	分析	かい	○	解決	
明確	19	46%	11	58%	明	めい	○	明治維新	めい	○	確立	
外交	22	54%	11	50%	外	がい	○	外交	こう	○	交通	
人種	26	63%	3	12%	◆人	じん	○	人生	じん	○	種類	

表7「全く自信がない」が最も多い漢語及びその教科書での学習状況

漢語	③「全く自信がない」			漢語として既習	漢字として既習							
	個数	全体に占める割合 (=個数/41)	正答数 (=正答数/個数)		漢字	発音	既習	漢語例	漢字	発音	既習	漢語例
答案	15	37%	3	20%	答	とう	×	案	あん	○	案内	
混合	16	39%	2	13%	混	こん	○	混乱	こん	○	集合	
器用	16	39%	13	81%	器	き	×	用	よう	○	用意	
解答	18	44%	2	11%	解	かい	○	解消	かい	×		
分野	19	46%	2	11%	◆分	ぶん	○	分析	ぶん	○	野球	
攻撃	20	49%	2	10%	攻	こう	○	専攻	けい	×		
余裕	22	54%	2	9%	余	よ	×	裕	ゆう	×		
活字	23	56%	4	17%	活	かつ	×	字	じ	○	漢字	
符号	24	59%	0	0%	符	ふ	×	号	ごう	○	番号	
着々	25	61%	1	4%	着	ちやく	○	到着	ちやく	○	到着	
塔	28	68%	2	7%	塔	とう	×					
毛布	29	71%	8	28%	毛	もう	×	布	ふ	○	財布	
鉄砲	31	76%	2	6%	鐵	てつ	○	鉄筋	てつ	×		
莫大	31	76%	0	0%	莫	ばく	×	◆大	だい	○	大学	
都	34	83%	0	0%	都	ぐん	×					
紺	35	85%	0	0%	紺	こん	×					

表6は、多くの学習者が「あまり自信がない」と回答した漢語を取り上げたものである。ここから、「あまり自信がない」が多い漢語は、すべて漢語としては学習していないが、漢字としては既に他の漢語の中で学習している場合がほとんどである。この点は「自信がある」が多い漢語の特徴の一部と重なっているが、両者を比較すると、「あまり自信がない」の方が、複数の音読みをもっている漢字（◆印）が多く含まれていることがわかる。例えば、「人種」の「人」については、「じん」（人生、人物、人類など）と「にん」（人気、人間、人数など）を既に学習している。このように、複数の音読みを学習しているために、推測時に選択に迷い、自信をもって回答することが困難になったと考えられる。

表7は、学習者が「全く自信がない」と回答した漢語を取り上げて示したものである。ここから、「全く自信がない」が多い漢語は、すべて漢語としては学習していないことがわかる。漢語に使用されている漢字についても、すべての漢字を学習している場合は少ないことがわかった。それぞれの漢字はすべて既に学習しているにもかかわらず、全く自信をもっていないものは、「混合」「分野」「着々」の3語であった。それには、以下の理由が考えられる。まず、「混合」の「混」は学習したもの、既習漢語の中で「混乱」の1語しかないため、推測に利用できる漢語が少なかったためだと思われる。次に、「分野」の「分」については、「ぶん」と「ふん」の両方の読み方を学習しており、どちらが正しいか迷ったものと推測できる。また、学習した漢語の中に「分野」の「野」と

いう漢字が使われている漢語は「野球」の1語しかなく、推測に利用できる漢語が極めて少ないためだと思われる。最後に、「着々」という漢語は中国語に存在しないことや、日本語学習の初中級では、「着々」のような「々」を用いて同じ読みをする漢語は少ないことなどから、回答時に自信が持てなかつたのではないかと思われる。

以上をまとめると、「自信がある」漢語は、「漢語」として既習のものが半分で、「漢字」として既習のものが残りの半分である。「あまり自信がない」漢語は、ほとんど漢字として既習したものであり、それらの既習漢字には、複数の音読みを持つ漢字が多い。「全く自信がない」漢語は、漢語としても学習しておらず、漢字としても、すべての漢字を学習していない場合がほとんどという結果であった。言い換れば、既習漢語及びそれを利用した単純な未習漢語の推測（音読みが1つである場合、例：表5の「流行」）については、学習者は通常確信を持って、そして正しく答えていた。しかし、既習漢語を利用し、複雑な未習漢語を推測する場合（音読みが2つ以上ある場合、例：表6の「夫人」）は、学習者はあまり確信が持てない傾向が見られた。そして、既習漢語の知識が利用できない未習漢語の推測（例：漢語としても、漢字としても学習していない場合）については、学習者は全く確信を持てないことがわかった。このように、調査項目の漢字・漢語の既習状況が、確信度に大きな影響を与えていることが明らかになった。この事実は、仮説2を支持していると言える。

3.3 確信度別の誤答分析

前節では、調査項目（漢字・漢語）の学習状況が確信度に影響する要因であることが明らかになった。それを基に、本節では、調査協力者の誤答に着目し、既習漢語と未習漢語において、それぞれどのような課題が存在するのか。さらに、既習漢語と未習漢語に関係なく、日本漢字音教育の課題は何か、を明らかにする。

表8～10は、確信度別に、同様の誤答が3人以上の学習者に見られた漢語を取り上げたものである。表8は「自信がある」、表9は「あまり自信がない」、表10は「全く自信がない」の誤答の一覧である。表8～10の誤答にはそれぞれどのような特徴が見られるのだろうか。誤答のパターンで考える場合、一般的に、確信を持っている人の方は、表8のような正答に近い間違い（長短や清濁などによるもの）をするが、確信を持っていない人の方は、表10のような正答から外れた間違い（母音の交替や子音の交替などによる）をすることになるため、仮説3を立てた。仮説3を検証するために、まず、どのような誤答パターンがあるかを調査した。先行研究も参考にし、正答の日本漢字音と誤答の日本漢字音を対照して問題点（つまり誤っている箇所）の分類を行った。その結果が表11である。表11の「-」は、その誤答例が本調査で見られなかったことを意

表8 「自信がある」の誤答について

番号	漢語	①「自信がある」の誤答(3回以上出現)
[3]	続々	つきづき7
[5]	機関	きかい3
[9]	信号	しんごう8
[16]	歌手	かしゅう6
[21]	答案	こうあん3
[22]	混合	こんご3
[24]	分解	ふんかい3
[33]	評価	へいか4
[34]	人種	にんしゅ3
[37]	税	ぜ3
[39]	誤解	ごうかい3
[40]	永遠	ようえん4
[43]	風景	ふうけい4

表9 「あまり自信がない」の誤答について

番号	漢語	②「あまり自信がない」の誤答(3回以上出現)
[1]	外交	かいこう6
[3]	続々	つづ5
[9]	信号	しんこう7
[12]	攻撃	こうき3
[15]	自治	じじ3
[17]	応用	おんよう5
[21]	答案	たあん4
[23]	夫人	ふうじん4
[24]	分解	ふんかい5
[27]	是非	しひ4
[33]	評価	へいか7
[34]	人種	にんしゅ4
[36]	莫大	もうだい3
[37]	税	ぜ3
[43]	風景	ふうけい4
[47]	着々	きぎ4

表10 「全く自信がない」の誤答について

番号	漢語	③「全く自信がない」の誤答(3回以上出現)
[2]	分野	ふんや4
[3]	続々	つきづき3
[4]	符号	ふこ3
[9]	信号	しんこう3
[16]	自治	じじ4
[19]	易	くん10
[20]	塔	た7
[22]	混合	こんご3
[23]	夫人	ふうじん3
[24]	分解	ふんかい3
[26]	毛布	もぬ3
[27]	是非	しひ6
[33]	評価	へいか8
[36]	莫大	もうだい6
[42]	解答	かいたつ3
[44]	錯	かんゆ
[45]	活字	ほうじ3
[47]	着々	きぎ5

表11 誤答のパターンについて

		誤答のパターン	誤答例
		(1)母音	樹(かん)
1.漢字レベルで起こる誤り	(1)母音	① 母音の交替	樹(かん)
	(2)子音	② 母音の脱落	信号(しんこう)
	(3)半母音	③ 清・済・半済	信号(しんこう)
	(4)特殊拍	④ 子音の交替	答案(こうあん)
	(5)音節	⑤ 子音の脱落・誤送	—
	(6)その他	⑥ 半母音の脱落と誤落	入社(にゅうしゃ)*
		⑦ 長短	信号(しんこう)
		⑧ 假音	活字(かいて)
		⑨ 滑音	応用(おんよう)
		⑩ 音節の圧縮	—
2.単語レベルで起こる誤り	(1)母音	⑪ 特殊拍以外の音節の脱落・誤落	攻撃(こうき)
	(2)子音	⑫ 1字の発音の脱落	会場(こうじょう)*
	(3)半母音	⑬ その漢字別の音読み、「義」	人怪(にんじや)
	(4)特殊拍	⑭ 「形」が近い他字の音読み	人怪(にんじや)
	(5)音節	⑮ 「その漢字「義」が近い他字の音読み」	着々(つづくづく)
	(6)その他	⑯ 漢字レベルで起る誤りが2つ	是非(しひ)
		⑰ 漢字レベルで起る誤りが3つ	活字(はうじ)
		⑱ 漢字レベルで起る誤りが4つ	莫大(もたい)
		⑲ 漢音化・半濁音化	供給(こうきゅ)
		⑳ 促音化	空手(かうて)
		㉑ 「義」「形」が近い他の単語の誤読み方	人怪(じんかい)

味する。「*」は、表8～10には見られないが、本調査の結果より、観察された誤答パターンの漢語例である。誤答を正答と対照した結果、母音の交替や子音の交替などのような漢字レベルで起こる誤りもあり、濁音化・半濁音化や促音化などのような単語レベルで起こる誤りもあった。さらに、「是非（しひ）」、「活字（はうじ）」、「莫大（もたい）」のような複数の誤答パターンを持っているものもあった。表11のような誤答パターンに従い、表8～10の誤答をそれぞれ分析した。分析方法については、表10(▼印)の「分野（ぶんの）」と「莫大（もたい）」を例に説明する。

まず、「分野（ぶんや）」を「ぶんの」と読んだのは、「野」の訓読みが「の」であることが考えられる。従って、分野（ぶんの）を表11の分類に基づいて分析すると、「⑭ その漢字「義」が近い他字の音読み」（以下、「音訓」と略す）となる。

次に、「莫大（ばくだい）」を「もたい」と読んだのは、中国語の発音の影響が大きかったと考えられる。なぜならば、「莫大」は中国語で「mo4 da4」と発音するため、学習者は日本漢字音の場合、「莫」が「も」と考えただろう。「大」については、「大学（だいがく）」と「大氣（たいき）」のように「だい」と「たい」の2つの日本漢字音を学習

しているため、回答時迷ったと考えられる。その推測結果となった「莫大（もたい）」を表11の分類に基づいて分析すると、4つの誤答パターンがあることになる。まず、「ばく」を「も」を読んだ際には、④子音の交替、①母音の交替、⑧促音の脱落という問題がある。次に、「大（だい）」を「たい」と読むには、③清・濁・半濁（以下、「清濁」と略す）という問題がある。従って、「莫大（もたい）」という誤答には、④①⑧③の4つの問題がある。分析の都合上、本研究では、この誤答を「⑯漢字レベルで起こる誤りが4つ」（以下、「誤答4つ」と略す）という誤答パターンに分類する。また、「⑮漢字レベルで起こる誤りが2つ」（以下、「誤答2つ」と略す。例：是非（しひ））と「⑯漢字レベルで起こる誤りが3つ」（以下、「誤答3つ」と略す。例：活字（ほうじ））に分類された誤答を分析すると、⑯の誤答と同じように、大半は中国語の発音によるものだとわかった。

以上の分析方法で表8～10を分析した結果を図4～6に示す。図4は「自信がある」、図5は「あまり自信がない」、図6は「全く自信がない」の誤答パターンの結果である。

図4～6において、上位の5パターンを見ると、「自信がある」グループは、⑦長短、⑭音訓、③清濁、⑬その漢字の別の音読み、「義」「形」が近い他字の音読み（以下、「多音」と略す）、①母音の交替である。一方、「全く自信がない」グループは、⑮誤答2つ、③清濁、⑯誤答3つ、⑭音訓、①母音の交替である。そして、「あまり自信がない」グループは、③清濁、⑮誤答2つ、⑦長短、⑬多音、⑭音訓であることがわかる。このように、確信度が低くなるにつれて、⑦長短が次第に少なくなるのに対し、⑮誤答2つと⑯誤答3つが次第に目立つようになっている。そして、⑮と⑯の詳細を示した表12から、⑮の中では①母音の交替が特に多く、⑯のなかでは①母音の交替と④子音の交替が最も多い、ことが明らかになった。これらのことから、確信度と誤答のパターンには一定の関係があり、この事実は仮説3を支持している。

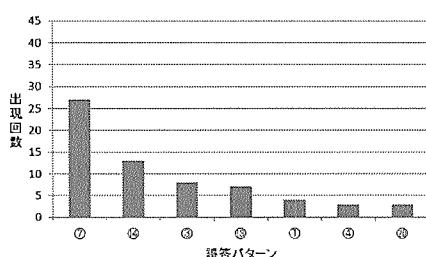


図4「自信がある」の結果

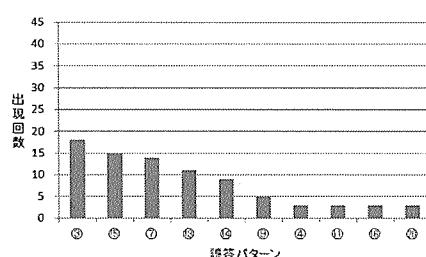


図5「あまり自信がない」の結果

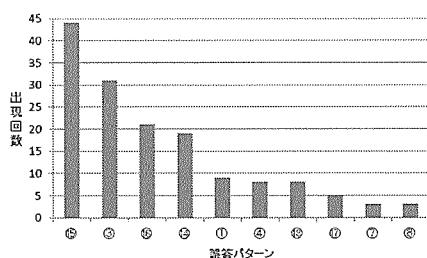


図6「全く自信がない」の結果

表12 誤答パターン⑮と⑯の詳細

詳細	誤答	人数	小計
⑮	①+⑦ 塔(た)	7	12
	①+⑦ 塔(たい)	4	
	①+⑧ 塔(たく)	3	
	①+⑧ 解答(かいたつ)	3	
	①+⑧ 活字(ごくじ)	3	
	④+① 是非(しひ)	6	
	④+① 莫大(もくだい)	3	
	④+① 紺(がん)	3	
	④+⑥ 郡(じゅん)	6	
	⑦+③ 符号(ふうこう)	3	
	⑦+⑩ 毛布(もぬの)	3	
⑮の小計		44	44
⑯	④+①+⑧ 莫大(もうだい)	6	17
	④+①+⑧ 莫大(もだい)	6	
	④+①+⑧ 活字(ごくじ)	5	
	④+①+③ 莫大(もくたい)	4	
	⑯の小計	21	21
合計		65	65

さらに、仮説3の検証以外に、以上の結果から、以下の2点も明らかになった。第一は、確信度と関係なく、学習者の誤答には、漢字レベルで起こる誤りがほとんどであり、単語レベルで起こる誤り（⑯～㉐）が非常に少なく、特に⑯濁音化・半濁音化と⑯促音化による誤答は見られなかったことである⁹。つまり、学習者は単語レベルよりも漢字レベルでよく誤りを犯している。従って、中国語話者を対象とした日本漢字音教育の課題を解決するには、まず漢字レベルの誤答に注目するべきであると言える。第二は、仮説3を仮説2と結びつけると、1) 既習漢語の確認で最も間違えやすいのは長短である、2) 既習漢語に含まれる漢字で構成される未習漢語の推測で最も間違えやすいのは清濁である、3) まったく未習の漢字で構成される未習漢語の推測で最も間違えやすいパターンとしては母音の交替と子音の交替が特に目立つ、ことがわかった。

4まとめと今後の課題

本研究の結果をまとめると以下になる。第一に、学習者自身の回答に対する確信度と、実際の読み方の正誤との間に相関関係があることがわかった。第二に、学習者の確信度は、当該の漢字・漢語が既習か未習かに大きく依存しているということがわかった。既習漢語及びそれを利用した単純な未習漢語の推測では、学習者は通常確信を持って正しく答えていたが、既習漢語を利用し、複雑な未習漢語を推測する場合は、学習者はあまり確信が持てない傾向が見られた。そして、既習漢語の知識が利用できない未習漢語の推測では、学習者は全く確信を持てないということがわかった。これらのことから、既習漢語、既習漢語を応用した未習漢語、完全な未習漢語に分けて見た場合

⁹ 3人以上が犯している同様の誤答を分析した結果、延べ誤答パターン総数は300で、そのうち単語レベルの延べ誤答パターン数は6で、全体の2%（内訳：⑯は0%、⑯も0%、㉐は2%）に過ぎない。

に、日本漢字音習得の実態が学習者の確信度に表れていることが明らかになった。ゆえに、確信度という尺度を含めた形で、日本漢字音習得の課題をさらに見直すべきことが示唆された。第三に、実際に確信度により、誤答パターンも異なっていたということである。確信度が高い場合の誤答には、先行研究でも指摘されている長短と清濁の問題の他に、音訓問題も顕著であった。一方、確信度が低い場合の誤答には、これまでほとんど指摘されていない母音の交替と子音の交替の問題が目立った。そして、確信度があまり高くなかった場合の誤答には、清濁が最も多かった。以上の個別の問題点を総合的にみると、共通問題点は、単語レベル（促音化や連濁化など）ではなく、ほとんどが漢字レベル（長短や清濁など）の問題であることがわかる。つまり、これまでの研究で注目されている単語レベルで起こる誤り（促音化や濁音化）は中級日本漢字音学習上においてそれほど大きな課題となっていないことが明らかになった。従って、中級日本漢字音の課題として、漢字レベルで起こる誤りのパターンを中心に問題点を解決すれば、中国語話者にとって日本漢字音はより一層効率的に習得できると考えられ、今後の中国語話者を対象とする日本漢字音教育の発展のために、本研究は一定の意義があったと考えられる。これらの学習困難点を、どの順序で取り上げ、どのように解決していくかについては、今後の課題としたい。

参考文献

- 阿久津 智「漢字圏の学生に対する漢字教育について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6、1991、pp.129-144。
- 阿久津 智「濁音の問題」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』8、1993、pp.49-62。
- 加納 千恵子「漢字圏学習者への中級漢字指導の問題（2）：音読みが2つ以上ある漢字の指導」『日本語教育方法研究会誌』1（3）、1994、pp.4-5。
- 胡 曜睿「漢字の音読みの習得に及ぼす母語の影響：中国人日本語学習者の場合」『明海日本語』17、2012、pp.93-102。
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会『日本語能力試験出題基準（改訂版）』凡人社、2007。
- 濱田 美和・高畠 智美「中国人学習者に対する漢字教育のための基礎研究：漢字の読み・書きクイズにおける誤答の分析」『富山大学留学生センター紀要』8、2009、pp.1-12。
- 宿 久高、周 異夫主編『日語精読』、外語教研出版、2006年。